

Title	ラムトン『ペルシア語文法』を日本人としてどう読むか 上
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 42 p.77-p.96
Issue Date	1978-03-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80713">https://hdl.handle.net/11094/80713</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ラムトン『ペルシア語文法』を日本人としてどう読むか

上

勝 藤 猛

Notes on A. K. S. Lambton, *Persian Grammar*

Takeshi KATSUFUJI

تفسیر کتاب دستور زبان فارسی بقلم خانم دکتر آن لامبتون

نویسنده : تاکشی کاتسوفوجی

درست بیست و پنج سال پیش یعنی ربع قرن است که خانم دکتر لامبتون، ایرانشناس بزرگ انگلیستان کتاب دستور زبان فارسی را چاپ کرده است. بعد از آن دانشجویان بیشمار جهان برای تحصیل زبان فارسی از آن استفاده کرده اند.

در ژاپن سطح ایرانشناسی هنوز بالا نیامده و تعداد کتابهای فرهنگ و دستور فارسی هم محدود است. بدین جهت برای دانشجویان ژاپنی که قصد یاد گرفتن فارسی را دارند مراجعه به کتابهای فرهنگ و دستور اروپائی ضروری است.

دانشجویان ژاپنی در دبیرستان حداقل سه سال انگلیسی میخوانند و اغلب آنها برای فهمیدن این کتاب اشکالی ندارند. به علاوه انگلیسی زبان بین‌المللی شده و آنهایی که از کشور خارج میشوند احتیاج بزبان انگلیسی دارند. با استفاده از این کتاب دستور زبان میتوان زبان فارسی خود را به مراتب قوی‌تر نمود.

من میخواهم برای دانشجویان ژاپنی این کتاب را تفسیر کنم. البته زبان فارسی و زبان انگلیسی از يك ریشه میباشند اما گاهی فارسی هم با ژاپنی شباهت دارد و بی‌فایده نمیدانم که زبان فارسی را با زبان ژاپنی مقایسه کنم. امیدوارم دانشجویان مطالب این کتاب را تا حد امکان درك نموده و بکار ببرند.

は じ め に —— なぜラムトン『ペルシア語文法』を読むか ——

アン・K.S.・ラムトン『ペルシア語文法』（1953年初版，ケンブリッジ大学出版局）は英語で書かれたペルシア語文法書である。初版以後少々の改訂を施してしばしば増刷されてきている。われわれ大阪外国語大学ペルシア語学科では，二年次と三年次の二年間，毎週一回一時間半を費して本書を読み通すことにしている。その読み方は，英語による説明は発音することなく直ちに日本語に訳し，ペルシア語例文はこれを発音して訳する。そして必要なところで教師が説明を加える。各課の末尾にある*Vocabulary*と*Exercise*，および95頁以後の各所にある読み物は，省略して学生の自習に任せる，ということにしている。試験としては，ペルシア語例文の中から選び，その英文を示してペルシア語訳させる。つまり文法的知識だけでなく，作文の基礎を習得させることをねらいとする。ペルシア語教科書として私が本書を重視する理由は次の五つである。

1. 日本人の大部分は中学校・高等学校を通じて英語を学習しているので，本書の英語の理解にさほど困難はないはずである。

2. 日本人は国際語としての英語が使える必要があり，ペルシア語国たるイランやアフガニスタンでは，外人は英語に堪能であることが期待されている。

3. 日本語によるペルシア語の入門書や辞書が限られているのに反して，英語によるものは数多くあるから，英語を通じて学習する方が進歩の可能性が大きい。日本語による入門書といえども，英文法の用語で説明されているから，英語に不慣れな人はペルシア語習得にも不利とならざるをえない。

4. 本書は全くの初学者にはむずかしいが，初歩的知識を得た人が，学習や経験によって増加するペルシア語の知識を整理し深化させるのに，もっとも適している。即ち，古典文への言及もあり，またアラビア語（日本語における漢文に当る）の説明も詳しく，本書を十分に理解し，かつ有効に応用することによって，ペルシア語についての高度な知識を得ることができる。

5. この小論は実は本書出版二十五周年を記念するためのものである。私が友人に誘われて共同で本書初版本を購入したとき以来，日本では何百，あるいは千以上のペルシア語学徒が本書の恩恵を蒙ってきた。日本は世界中で本書がもっとも歓迎されている国の一つであろう。僭越ながら，私は日本の読者を代表して，著者ラムトン博士に二十五周年のお祝いを申し上げたい。

さてこれから，緒言*Preface*，序論*Introduction*および各課*Lesson*について順に説明を加えることにする。説明に当っては，普通の大学生程度の学力で一読して理解できるようなところを除き，わかりにくい箇所に重点をおく，またペルシア語例文で，実際によく使われていながら本書から漏れているものを補うことにする。また緒言の冒頭にみえる本書の意図に従って，現代文に重きをおき，古典文についてはその説明を省略することもある。学習者はまず現代文を十分に理解し，しかるのち古典文に向かうのが望ましいと考えるからである。

## 緒 言

脚注にペルシア語の時代区分が示されている。その用語が重要なので、まとめて表示する。

- (a) *Old Persian* (略称OP)「古代ペルシア語」——楔形文字によるアケメネス朝の碑文。
- (b) *Middle Persian* (MP)「中世ペルシア語」——パフラヴィー語によるゾロアスター教経典，ササン朝の碑文，中央アジア出土のマニ教経典。
- (c) *New Persian* (NP)「近世ペルシア語」——イスラム以後の，アラビア文字によるもの。
  - (1) *Classical Persian*「古典ペルシア語」——カージャール朝（1796—1925）まで。
  - (2) *Modern Persian*「現代ペルシア語」——現在用いられているもの。

本書が扱うのは「近世ペルシア語」の中の主として「現代ペルシア語」で，時々「古典ペルシア語」にも言及している。地域的にはイラン（テヘランを中心とした）のペルシア語に限られる。

## 序 論

本書ではまず発音，ついで文字が説明されている。私の解説では，まず発音，ついで転写を扱うことにする。

発音について述べる前に，わかりきったことであるが，簡単な定義を示しておく。まず<sup>ぼ いん</sup>母音とは「声が出始めるまでの間，その通路が舌やくちびる等で妨げられない時の音。標準的な現代日本語ではア・イ・ウ・エ・オの五つ」，<sup>し おん</sup>子音とは「発音の際，呼吸が発音器官のどの部分かに妨げられてできる音」（いずれも岩波国語辞典）

XIV頁に長方形の図があり，それに黒点で基本母音を，赤点でペルシア語母音を，入れてある。この長方形上の点は，その母音が発音されるとき舌の最高点の位置を示す。即ち前より後よりか，高いか低いである。より厳密に言えば長方形でなく不等辺四辺形となる。ただし舌の最高点の位置など，自分のはもちろん，他人のも目で見えるわけでないから，理屈だけとみなせばよい。また基本母音なるものもそれを詳しく説明することはここでは意味がない。

ペルシア語の母音を，服部四郎『音声学』（岩波全書）の助けをかり，日本語のそれと比較しながら説明しよう。

転写 長短                      説明，とくに基本母音との比較

- ī    長    唇をできるだけ横に張る。東京方言の「良い」（イー）。[i]に同じ。
- e    短    「イ」よりの「エ」。[e]よりやや[ɛ]寄り。
- a    短    「エ」寄りの「ア」，「蛙」（シヤケ）の「ヤ」。[a]に同じ。ただしkとgの後では[æ]となる。
- ā    長    「アー」と「オー」の間，「輪を」（ワオ）の「ワ」。唇がほぼ円形になる。[a]に同じ。
- o    短    「ウ」寄りの「オ」，「十」（トー）の母音。[o]よりやや[ɔ]寄り。
- ū    長    唇をできるだけすぼめる。[u]に同じ。

以上のうち日本人としてとくに注意すべきは、a と ā の区別で、長さも唇の形も違う。

イランのペルシア語の二重母音はei, ouで、アラビア語およびアフガニスタンのペルシア語では、それぞれai, auとなる。

子音については、現地人の発音をまねることが何より重要であるが、いくつかの説明を加える。zhは摩擦音で、フランス語のjと同じ。

qはイランではghと発音される。アラビア語やアフガニスタンではqである。

vはアラビア語・アフガニスタンではwである。

語末のh字は多くの場合発音されない。しかしī, ā, ūの後では発音される。例えばtanbīh「罰」、shāh「王」、kūh「山」。またdah「十」、deh「村」も発音される。これらのhはその直前の母音の口の形のままで発音するのがよい。例えばshāhは、日本語では「シャーハ」に近く、最後の「ハ」はごく軽くてほとんど聞こえなくてもよい。これをもし「シャーフ」と言えば、日本語の「フ」は唇が動くからfの音にとられる恐れがある。

なお日本人として注意すべき区別は次のようである。b—v, s—sh, h—kh—k, r—l, h—f, gh—g.

単語のstressについては関係する各所で説明されているし、文章のintonationについては本書の末尾、260—265頁に詳述されているから参照のこと。ともに発音において非常に重要であって、決しておろそかにすべきでない。

次に転写である。ペルシア語を引用するのに、その本来のアラビア文字による表記のままでできればもっともいいが、アラビア文字の活字を備えた印刷所、およびその活字を拾える人が少ないという実情のため、多くの場合はローマ字に直して表記される。転写の体系は一種でなく、いくつもある。その代表的なものとして次の五種の書物の方法を示す。かつこ内は略称。

Lambton, A. K. S., *Persian Grammar*, 1953 (本書)

——— *Landlord and Peasant in Persia*, 1953 (地主)

Steingass, F., *Persian-English Dictionary*, 1892 (スタインガス)

Boyle, J. A., *Grammar of Modern Persian*, 1966 (ボイル)

黒柳恒男『ペルシア語入門』1973 (黒柳)

なおLambtonの他の二著、*Persian Vocabulary*, 1954 の転写は「本書」に同じで、*The Persian Land Reform*, 1969 は「地主」に同じ。

転写に二通りある。transcription「[普通の]転写」と transliteration「翻字」である。アラビア語で異なる文字・異なる発音が、ペルシア語で同じ発音になることがある。このような場合、普通の転写によれば、同じ音には同じローマ字を用い、文字の相違を考えない。一方、翻字では文字の相違までも示す。例えばペルシア語で〔z〕の音をもつ字は四つある。転写ではこの四つをすべてzで示す。翻字では、例えば「スタインガス」の方法によれば、z, z, z, zと四通りに区別する。

この場合に附加される記号は、使用頻度の低い方に向かって複雑となる。ここではz, ẓ, z̤, z̥の順である。

上に挙げた五冊のうち、「地主」はアラビア文字を出していないから、翻字によっている。アラビア文字を使ってあれば転写でもいい。「ボイル」の特色は一音を一字で示そうとしたことである。

本論文はアラビア文字を用いないから、転写は翻字による。また印刷をなるべく容易にしようとした。そのため「ボイル」式は附加記号が多くなるから採らない。結局、母音は「黒柳」式、子音は「地主」式とした。「地主」と「スタインガス」は似ているが、khとk<sup>h</sup>, ghとg<sup>h</sup>という相違がある。下線はふつうはイタリックにする指示であるから、そう印刷される恐れがあるし、この下線は必須のものではない。なお「地主」のṭを「スタインガス」ではṭとしてあり、後者にṭがないが、これは捲舌音（ウルドゥー語にある）を表すためである。

なお平凡社版アジア歴史事典の第一巻の巻頭に、ペルシア語など西アジア諸言語のローマ字およびカナによる転写法が示されており、参照に値いする。そこでのペルシア語のローマ字転写は「スタインガス」式である。

いずれにせよ重要なことは、どれかの方法をしっかりと理解して、それを厳密に適用することである。

	本 書	地 主	スタインガス	ボイル	黒 柳	本論文
母 音	i	ī	ī	ī	ī	ī
	e	i	i	e	e	e
	a	a	a	a	a	a
	ā	ā	ā	ā	ā	ā
	o	u	u	o	o	o
	u	ū	ū	ū	ū	ū
二重母音	(ei)	ay	ai	ei	ei	ei
	(ai)			ai		
	(āi)		āy	āi		
	(ou)	ou	au	ou	ou	ou
	(ui)		ūy	ūi		
子 音	b	b	b	b	b	b
	p	p	p	p	p	p
	t	t	t	t	t	t
	s	s	s	s	s	s
	j	j	j	j̣	j	j
	c	ch	ch	č	ch	ch
	h	ḥ	ḥ	ḥ	h	ḥ

本 書	地 主	スタインガス	ボイル	黒 柳	本論文
x	kh	<u>kh</u>	x	kh	kh
d	d	d	d	d	d
ʔ	<u>z</u>	<u>z</u>	<u>z</u>	z	<u>z</u>
r	r	r	r	r	r
ʔ	z	z	z	z	z
ʒ	zh	zh	ž	zh	zh
s	s	s	s	s	s
ʃ	sh	sh	š	sh	sh
s	ṣ	ṣ	ṣ	s	ṣ
ʔ	ẓ	ẓ	ẓ	z	ẓ
t	ṭ	ṭ	ṭ	t	ṭ
ʔ	ẓ̣	ẓ̣	ẓ̣	z	ẓ̣
‘	‘	‘	‘	‘	‘
ɣ	gh	<u>gh</u>	ɣ	gh	gh
f	f	f	f	f	f
q	q	q	q	q	q
k	k	k	k	k	k
g	g	g	g	g	g
l	l	l	l	l	l
m	m	m	m	m	m
n	n	n	n	n	n
v	v	w	v	v	v
h	h	h	h	h	h
y	y	y	y	y	y
アラビア語 のハムゼ	‘	‘	‘	‘	‘
ペルシア語 のハムゼ	——	——	‘	——	——
語末無音の h	e	eh	e	e	e <sup>h</sup>
khの次の無 音 の v	——	ẉ	v	——	ẉ
エザーフェ	e	i	-e	e	-e-

## 第 1 課

この文法書は冒頭からきわめてむずかしい問題を提起している。即ち 1 節でこういう、“ペルシア語には定冠詞・不定冠詞はない。大ざっぱに言って、名詞は *-ī* を付けることによって不定となる。例えば *ketāb* 「(その)本」、*ketāb-ī* 「ある本」”。著者は英文法の定冠詞・不定冠詞に相当するものをペルシア語で探して、英文法におけると同様、これを冒頭にもってきたのであろうが、ペルシア語の *-ī* はかなり面倒なものである。それで著者はこれに脚注を施している。“学習者は、ペルシア語における限定 *definite* と不定 *indefinite* の用法が英語における用法と正確に対応するとは思ってはない”

この不定を表す *-ī* については、この課の 1—5 節だけでなく、125—126 頁にも説明されている。この *-ī* に相当するものは、英語にも日本語にもないので、結局は本書の説明に頼りながら多くの実例から帰納して判断するほかない。上の例で *ketāb* に二つの意味があり、一つは「本一般、本というもの」を指し (本書 127 頁)、他は「特定の本」を指す。後者の意味でそれが目的語になれば、*ketāb-rā* となる。10 頁 11 節の例文

*Bāgh māl-e-pesar-e-ū st.* 「庭は彼の息子のものである」

において、*bāgh* 「庭」に「その」に当る指示形容詞はついていないが、英語でなら *the garden*、日本語なら「その庭」というところである。同様に、まず *yak gorbeh* 「ある猫」と言い、あとで *heivān* 「その動物」と言う。

「彼は私に本をくれた」の「本を」の三つの表現が 4 頁 6 節に見える。

1. *ketāb-rā* その本を、特定の本を
2. *ketāb-ī* 特定ではないがある範囲内の本
3. *ketāb* 本というもの——数や種類に関りなく

この *-ī* はペルシア語を日本語に直す場合にはあまり問題はない。ただし発音においてそこにストレスをおかないよう注意すべきである。*ketāb-ī* 「ある本」、*ketābī* 「本の、会語調でなく教科書風の[発音]」。この不定の *-ī* を文中で見きわめて正確に発音できれば、その人のペルシア語の力はかなりのものといえる。

一方、ペルシア語作文においてこれの用法はときにむずかしいが、多くの用例から判断するのが、面倒なようでもっとも正しい方法である。

要するに、この *-ī* は名詞の後に軽くつけるものであって、それだけ意味も軽く、わずかなニュアンスを添えるだけである。初学者は自信がなければこれを附けないのが無難である。附けないことによって意味がとりちがえられる恐れはない。

### 語釈

*bearer* (2 節) 支えるもの、ハムゼの支えとなる短い縦棒。

*transition* 「うつり」(2 節) または *off-glide* 「出わたり」(2 課 3 節)。ここでは母音から母音へ



の移り行きであるから、*hiatus* (母音接続) といってもよい。

*syntactical whole* (3 節) 文の構成上ひとかたまりのもの。ここでは「彼は／本とペンと鉛筆を／私に／くれた」で、「本とペンと鉛筆を」がひとかたまりである。

*more than one* (7 節) 二つ以上

「ānの複数形 ānhā と ānān は、それぞれ *respectively* 口語的・文法的ペルシア語で用いられる」(9 節) つまり「ānhā は口語的ペルシア語で、ānān は文語的ペルシア語で、それぞれ用いられる。」英語の A, B……C, D *respectively* は、A—C, B—Dであることを示す。

## 第 2 課

10頁9節、所有の表現、例えば「私の本」は、「私」*man*, 「の」*-e-*, 「本」*ketāb*を、日本語と逆の順に並べ、*ketāb-e-man*という。この場合、日本人としては英語の *my* という所有形容詞など思い出さなくていい。

同様に10節の「私のもの」も、英語の所有代名詞 *mine* を忘れて、「私」・「の」・「もの」*māl* をやはり逆に並べる。なおこの *māl* はモンゴル・トルコ・ペルシア・アラビア・パシュトゥ・ウルドゥーの諸語において、「家畜、財産」を意味する語である。

13頁19節、動物または物が複数で主語であれば、動詞は単数形をとるのが原則であるが、現代ペルシア語では複数形にもなるという本書の説明は、多くの実例で裏づけることができる。

### 語釈

{ <i>human being, rational being</i>	人間	
{ <i>irrational being</i>	人間以外の動物	
{ <i>inanimate object</i>	物	(2 節)

*enclitic* (5 節) 独立しないで他の語の中に含まれる、前接的。エザーフェがそれである。

## 第 3 課

20—22頁の14—18節は比較級と最上級を扱っている。14節で、*bad* 「悪い」の比較級は *d* と、比較級語尾 *-tar* の *t* が同化して *battar* となるとして、そのような綴りを書いてあるが、発音ではそうなくても、書くにはやはり *bad-tar* とする方がよい。

17節の「あの少年はこの少女より大きい」の「大きい」*bozorg* の意味は、「体が大きい」でなく、「年齢が上」ということである。

18節は *bīsh*, *bīshtar* である。一つ有益な表現を補っておく。

*Yak oṭāq bīshtar nīst.* 「一つの部屋で、それ以上はない。一部屋しかない」  
*bīsh*, *bīshtar* を使った諺を紹介する。

*Har keḥ bām-ash bīsh, barf-ash bīshtar.*

「屋根が大きければ、それだけ雪も多い」(分相応、収入が多ければ税金も多い)

18節, 最上級の表現たる *az hame<sup>h</sup>……tar* 「すべてより …… , もっとも ……」 はペルシア語らしい表現である。とくに述語としては……tar<sup>in</sup>よりこの方がよい。

*Man az hame<sup>h</sup> qashang-tar hastam.* 「私がいちばん美しいです」

19節, *Ān-rā gerān kharīd.* 「それを高く買った」は, 「高い」 *gerān* という形容詞がそのまま副詞として使われるという説明の例である。「安い」 *arzān*, 「いくらで」 *chand* (46頁22節) などをここに入れかえると, 日常よく使われる会話文ができる。

#### 第 4 課

27頁4節, 現在語根が *-av* で終わっていれば, その命令形単数は *-ou* となるという説明で, その例として *shenīdan* 「聞く」 (*shenav*)——*Be-shenou* 「聞け」 が示されている。形態の説明としてはそれでよいが, 実用的には「聞け」は, *Gūsh kon. Gūsh be-deh.* という。

29頁9節は人称接尾代名詞である。この用法は次のとおりである。例えば「私の本」をはじめて言うときは, 第2課9節におけるように, *ketāb-e-man* という。二度目それに言及するときは, *ketāb-am* という。つまりはじめは「私の」をはっきりさせるために *-e-man* を用い, その次からは軽くして *-am* をつける。この人称接尾代名詞はストレスをもたず, したがって意味も軽い。

30頁10節はこの代名詞が目的格にも使われることを述べている。これは口語文でしばしば見られる。例えば

*Mībīnam-at.* 「君に会おう」

この代名詞は前置詞にもつく。

*Beh-esh goftam.* 「私は彼に言った」

この場合, *be<sup>h</sup>* の *h* は発音される。

13—16節は「自身」を意味する *kh<sup>o</sup>d* の説明である。その脚注で *kh<sup>o</sup> īsh* が「親戚」の意味をも有するとある。この用例を筆者はアフガニスタンのヘラートで聞いたことがある。「自身」から来たものであるから日本語の「身内<sup>みうち</sup>」に当る。

22節, *hīch* の用法, これは肯定・否定両方に用いられるように説かれているが, 実際はほとんど否定だけに用いられる。

35頁24節, *tour* 「方法, よう」の母音は *ou* であって *ū* でないことに注意すべきである。

#### 語釈

*simple tenses* (10節) 一語で表現できる時制, 現在と過去を指す。

#### 第 5 課

この課は数字に関する内容を扱っている。基数の言い方で注意すべきことは, 「百」「千」はそれぞれ *şad*, *hazār* だけでよく, 「一」 *yak* をつけないことである (アフガニスタンではつける)。なお「二百」 *devīst* は *dah bīst* (10×20) から作られている。また英語の *cipher* は *şefr* 「零」から来

ている。またアフガニスタンにはlak「十万」の単位がある。

41頁9節は分数の表現で、それに二つあり、一は分母の基数・分子の基数、他は分子の基数・分母の序数を、それぞれ並べる。前者は分子が1の場合に限られ、例えば $\frac{1}{4}$ をchahār yakというのは、日本語で「よつ・いち」と言うのに当る。これを縮めてchārakという、重量単位で1マンの $\frac{1}{4}$ のことである(258頁参照)。分数の表現法としては後者、つまりyak chahāromというのが普通である。

10節、百分率にも二通りの言い方があり、例えば10%はṣad-ī dah, dah dar ṣadというが、後者がよく使われる。

43頁16節は助数詞*classifier, numerator*である。示されている例は、「三人の女」「百頭の牛」「五本の鉛筆」「四冊の本」「一着の服」「二軒の家」「十箇の卵」である。しかし(h)にいうように、口語では、人間にnafarを用いる以外、すべてtāを使ってよい。人間でもぞんざいに言うときはtāを使ってよい。ただ「ひとつ」だけは yak tāでなく、yak dāne<sup>h</sup>という。

49頁30節は年齢の聞き方と答え方である。ただし開発途上国民に日本人ほどの厳密さを期待してはならない。生年月日を聞いても、月日はもちろん、生年も不確かで、何年かの誤差を予想せねばならない。

次の質問文を覚えておく与会話に便利である。

Emrūz chandom-e-māh ast? 「今日は月の何日めか、何日か」(37頁脚注)

Sā'at chand ast? 「[今]何時か」

chand shanbe<sup>h</sup> 「何曜」(shanbe<sup>h</sup>の前についている数字を問う)

che<sup>h</sup> sā'at-ī 「何時に」

chand sā'at 「何時間」

## 語釈

*compound numeral* (14節) 複合数詞, bīst-o-yak「二十一」のように二語以上で作られるもの。

## 第 6 課

1節は受身の表現である。koshte<sup>h</sup> shodan「殺される」は、いわゆる殺人事件でなくとも、事故などで不慮の死をとげることをいう。病気で死ぬのはmordanという。

54頁4節, gashtanとgardīdanはshodanの, namūdanはkardanの, それぞれ文語的表現である。

6節は、主語を明示せず、他動詞三人称複数を使うと、その動詞の受身を表すという説明である。例えば

Mīgūyand. 「こう言われている」(英語の*they say*.)

gozāshtan「許す」(9節)をこれに使うと、例えばNa-mīgozārand. 「そうすることが許されない、そうしてはいけないことになっている」

56頁12節, shodanを可能の意味に用いることは口語で多い。ごく簡単な表現で事が足りるので覚

えておくに役に立つ。かつこ内は口語的発音。

Mīshavad (mīshe) ? 「できるか」

Na-mīshavad (ne-mīshe). 「だめだ」

Shod ? 「うまくいったか」

Na-shod. 「だめだった」

57頁17節(b)は「あなたが来る時までに、私は出かけてしまっているでしょう」の文において、「来る」に仮定法現在が用いられるという説明である。ここで注意すべきことは、「出かけてしまっているでしょう」の時制は、英語なら未来完了にするが、ペルシア語では現在完了を用いることである。同様の例文は、148頁7節、現在完了の用法(c)、および157頁18節、時を示す接続詞 tā の用法(ii)に見える。

58頁17節(c) Tā īn-rā na-khānam, bāvar na-mīkonam. 「私はそれを読まないうちは信用しません」において、「読む」の仮定法を否定にすることの説明に、“tāの導く節が未来をいう場合”とあるのは、正確ではない。なぜなら、「あなたはそれを読まないうちは、理解できないでしょう」(152頁)は未来だからいいとして、「私は彼に会わなかったうちは、彼がここにいることを知らなかった」(157頁)「私と兄(弟)は妻をめとらなかったうちは……生活を共にしていた(別居しなかった)」(158頁)は、ともに過去を述べているからである。ここは“主節と従属節の動詞がともに否定で、ともに肯定に直しても意味が通ずる場合”というべきである。「……でないうちは～でない」は「……すれば～である」と同義である。上の例文を肯定に直せば、それぞれ「私はそれを読めば信用する」「あなたはそれを読めば理解できる」「私は彼に会ってから、彼がここにいることを知った」「私と兄(弟)は妻をめとってからは……別居した」となる。

これと関連して58頁(c)の二つめの文「あなたが来るまで私は待ちます」の「来る」が否定にならないのを、著者は“慣用で” *by usage* というが、この文は主節・従属節ともに肯定だからである。もし「あなたが来ないうちは私は出かけない」なら、ともに否定詞がつくであろう。

18節, maṣammam shod 「彼は決心した」は、より口語的には taṣmīm gereft となる。

#### 語釈

*defective verb* (10節) 欠陥動詞、活用形を完全にはもっていない動詞。ペルシア語では次の二つである。使用される活用形とともに示す。

bāyestan—bāyad, mībāyad 「ねばならぬ」、bāyest, mībāyest, bāyest-ī, mībāyest-ī 「ねばならなかった」

shāyestan—shāyad 「たぶん」、shāyān 「ふさわしい」、shāyeste<sup>h</sup> 「ふさわしい」

### 第 7 課

この課では副詞・条件文・使役動詞が扱われている。中でも重要なのは条件文であり、それは(a)可能な条件文、(b)不可能な条件文に分けられる。条件文は非常に重要であり、また学習者は本書を

読むだけで充分理解できるはずであるから、それに載せられた例文をすべて暗記することが望ましい。そうすれば作文に大いに役立つであろう。ここでは別に書き加えることはない。

65頁4節、いくつもの副詞・副詞句が一つの文の中に入るには、その並べ方は、時・方法・場所の順となる。「彼は／昨日十時に／馬で／町へ／来た」という本書の例文を覚えていれば応用がきく。

67頁7節, *chonāncheh* の用法二番目の例文「私たちの状態をお知りになりたいなら、ぶじにやっています」は手紙の最初の部分に書く挨拶の文句である。

68頁8節は使役で、重要である。本書の説明にあるとおり、使役は動詞の現在語根に-*āndan* (口語的) または-*ānīdan* (文語的) を附加して作る。その活用形の中に-*ān-* (アレフとヌーン) があるから、それを見つければよい。

*jūshīdan* (*jūsh*) 「沸く」→*jūshāndan* 「沸かす」

*rasīdan* (*ras*) 「着く」→*rasāndan* 「もたらす」

不規則な例として挙げられている *neshastan* (*neshīn*) 「坐る」→*neshāndan* 「坐らせる, [反乱を] 鎮める, [火を] 消す」のほかに、一例を示せば

*raftan* (*rav*) 「行く」→*rāndan* 「行かせる, 運転する」その作用者名詞 (4 課1節 *b*) *rān-andeh* 「運転手」を知っておくとよい。

## 語釈

*single action* (5 節) 継続でなく、一回きりで終る動作。

## 第 8 課

ペルシア語の接続詞 *keh* には非常に広い用法があり、その一部として英語の関係代名詞に似たものがある。この *keh* の関係代名詞的用法の説明が、75頁5節から78頁15節までである。この用法は英語におけると同様、限定的 *restrictive* と叙述的 *descriptive* に分かれる。

限定的用法      先行詞-*ī*+*keh*      日本語では後から返って訳す。

「そこにいた男の人がその本を私にくれた」*Mard-ī keh ānjā būd*……………

「あなたのそばにいた小さな女の子は誰でしたか」*Dokhtar-e-kūchek-ī keh pīsh-e-shomā būd*……………

「あなたが持っている理性は不完全です」*‘Aql-ī keh dārīd*……………

「そこにいた人たちは去ってしまった」*Ān-hā-ī keh ānjā būdand*……………

「あなた方のうちでそこにいた人は何を見ましたか」*Shomā-hā-ī keh ānjā būdīd*……………

叙述的用法      先行詞 (-*ī*がつかない)+*keh*      日本語では前から挿入的に訳す。

「理性——それはその故に人間が動物に勝っているのであるが——は神の偉大な恵みである」

*‘Aql keh ensān bedān bar ḥeyvān bartarī dārad*……………

「世界の政治家たち——彼らは〔すべて〕この種の問題の解決に豊富な経験をもっている——の

善意に信頼して、我々はこの問題を提起する」 *Siyāsatmadār-ān-e-jahān ke<sup>h</sup> ……………*

「あなた方はそこにいたのですから、何を見たか言いなさい」 *Shomā ke<sup>h</sup> ānja būdīd……………*

限定的用法の最後の例では二人称複数であることをはっきりさせるために、*shomā*にわざわざ複数語尾をつけてある。叙述的用法の二番目の文を限定的にするなら、*siyāsatmadār-ān-ī dar jahān ke<sup>h</sup> ………*となる。

80頁20節(a)の例文、*Bāgh hamash sabz būd.* は、*hame<sup>h</sup>* 「すべて」に三人称単数の人称接尾代名詞-*ash*が附くと、*hame<sup>h</sup>-ash*でなく*hamash*となるという説明のためである。しかしこの例文はこんな発音上のささいなことよりも、構文が非常に重要である。即ちこの文は「庭、そのすべては緑であった」、換言すれば「庭はすべてが緑であった」という文なのである。他の例を挙げよう。

*Īn ketāb rang-ash sorkh ast.* 「この本は色が赤い」

*Shomā Fārsī-yetān kheilī khūb ast.* 「あなたはペルシア語がたいへん上手です」

こういう構文は英語になくて日本語にある。すぐ上の例でいえば、まず「あなた」という主題を提示して聞き手の注意を喚起する。主題を示す助詞が「は」である。そのあとでその主題の説明に入る。それが「ペルシア語が上手である。」という表現は会話文においてとくに有効である。

## 第 9 課

この課はすべて複合動詞を扱っている。しかし学習者はこの課の内容を熱心に理解し記憶する必要はない。ペルシア語の語彙をしだいにふやしていくうちにおのずと自分で整理できるからである。ここでは筆者の気のついたところに説明を加えることにする。

1 節(a) *chāne<sup>h</sup> zadan* 「売り手と買い手が交渉して値段をきめること、とくに買い手が売り手のつけた値段をねぎること」

*koshtī gereftan* 「レスリングをする」、*koshtī-gīr* 「レスラー」。レスリングはイラン人の好きなスポーツである。

(c) *pīsh āmadan* 「起こる」、*pīsh-āmad* 「出来事」

*pīsh keshīdan* 「前へ進める」、*pīsh-kash* 「贈り物」(104頁)

*dar āmadan* 「なる」 *dar āvardan* 「する」

*forūd* 「下」(62頁)、*forūd-gāh* 「飛行機が降りるところ、飛行場」

*farā*は、これを附けることによって音節がふえ、したがって意味が強くなる。これ自体は意味はない。

(d) *be<sup>h</sup> kār bordan* 「使う」 *be<sup>h</sup> kār raftan* 「使われる」

*az bein raftan* 「なくなる」 *az bein bordan* 「なくする」

*dar miān nehādan (gozāshtan)* 「そのことについて論じ合う」

(e) *gīr kardan* 「〔面倒なことに〕ひっかかる」、*gereftār shodan* (97頁) と同義。

*gīr āvardan* 「手に入れる」 *gīr āmadan* 「手に入る」

89頁2節( ) “アラビア語名詞＋ペルシア語動詞”の構造は、日本語における“漢語＋する”に似ている。即ち *fekr kardan* は「思考する」

(b) *maghlūb* は「征服」の受動分詞、*ghāleb* はその能動分詞である。

(d) *be-vojūd āvardan* 「作り出す」 *be-vojūd āmadan* 「作り出される」

91頁3節(a) ペルシア語複合動詞は、非動詞部分が同じで、動詞部分を *kardan*, *namūdan* にすれば他動詞に、*shodan*, *gashtan*, *gardīdan* にすれば受身に、それぞれなる。

(b) *kardan*, *shodan* 以外の動詞による他動詞と受身の表現で、上記1・2節の説明において、本書を補い、対になる複合動詞をいくつか示しておいた。(b)の「だます」「だまされる」の対は、(c)の動詞部分を使って、*ferīb dādan*, — *kh<sup>w</sup> ordan* ともなる。

(a)–(d)の四組のほかに、上記の例にもあるように、*āvardan* — *āmadan*, *bordan* — *raftan* の組もある。

93頁7節 ある不規則動詞の現在語根に *-idan* を付けて作る二次的動詞のことである。

例えば *kūftan* (*kūb*) 「砕く」から *kūbīdan* を作る。その過去分詞 *kūbīdeh* 「砕かれた」はイランでは「挽き肉」をいう。アフガニスタンではこれに一次的動詞を用いて *kōftāh* という(母音がイランとはやや異なる)。

また二次的動詞のもう一つの例 *tāftan* > *tābīdan* の現在分詞 *tābān* を用いて *keshvar-e-āftāb-tābān* とすれば「太陽の輝く国、日本」のことである。

## 第 10 課

この課は単語の構成 *word formation* であり、これも前課の複合動詞同様、学習者が自分の語彙を自分で整理すればよく、その参考として本書を利用するだけでよい。

3節、召使が主人に *Farmāyesh nā-dārīd?* と聞けば、「何かお申しつけることはございませんか」ということである。

*pūshāk*, *kh<sup>w</sup>orāk* は *maskan* とともに「衣食住」をいう。

98頁4節(e)–*kār* のつくものとして、*bedeh-kār* 「与える人、借り手」、その対として *ṭalab-kār* 「取る人、貸し手」。また *farāmūsh-kār* 「忘れっぽい〔人〕」がある。

(i)の(1)、地名としての *-ān* の例、*Tūrān* はトルコ人の地で、*Īrān* の対、『シャー・ナーメ』に見える。

*bīābān* 「荒野」は、*ābādī* 「集落」の対。

(2) 父称 *patronymics* を示す *-ān*。 *Bābakān* 「バーバクの子」、即ちササン朝の始祖 *Ardashīr* (*Bābak* の子) のことである。

(k) *-chī*, *-jī* はモンゴル語・トルコ語で作用者を表す接尾語。*doroshke* はロシア語起原で、一頭の馬に引かせる二輪車で客を乗せるものをいう。アフガニスタンでは *gādī* という。イランでは近年自動車の普及により少なくなった。

(l) -ābād 集落の名の接尾語で、ペルシア語圏に非常に多い。

よく用いられる接尾語を一つ加えると、-gāh「場所」 例えば dānesh-gāh「知識の場所、大学」、  
īst-gāh「止まる所、駅・停留所」

100頁5節、縮小の語尾の例のうち yār-ūは「野郎」に当る。ān yār-ū「あの野郎」。

-che<sup>h</sup> のつくのでよく使われるのは ketāb「本」→ketāb-che<sup>h</sup>「ノート」、tofang「鉄砲」→topān-  
che<sup>h</sup>「ピストル」

102頁7節(b)にはエザーフェがつかない。親属語彙はみなそうである。本書に引かれている例、  
pedar-zan「妻の父、義父」、dokhtar-‘amū「父方のおじの娘、いとこ」のほか、pedar-bozorg  
「祖父」など。

(f) peighām-bar「伝言を運ぶ人、使徒」は、普通はアレフが落ちてpeighambarと綴られる。

(g) āmad-o-shod, raft-o-āmad「行き来、往来」、またdād-o-setad「やりとり、交換」

104頁8節(b) kh<sup>o</sup>sh-akhlāq「よい道德の、立派な人柄の」、kh<sup>o</sup>shの対はbadである。

(f) bā-「のある」と bī-「の無い」が相い対する。bā-savād「読み書きの能力*literacy*のある」、  
bī-……「——の無い」。

bī-kār「〔現在たまたま〕用事がない、失業中である」

(g) 二つの名詞の間にアレフを入れる。例えば、rang-ā-rang「色とりどりの」

106頁10節、ham-は「同」の意、ham-kelās「同級生」、ham-sāye<sup>h</sup>「同じ蔭、隣人」

11節 por-「一杯の」と kam-「少ない」が相い対する。例えば

por-rang「濃い〔色、お茶など〕」、kam-rang「薄い」

por-zūr「力が強い」、kam-zūr「弱い」

14節 kh<sup>o</sup>d-「自身」を用いる複合語

kh<sup>o</sup>d-kār「自動の」

[qalam-e-] kh<sup>o</sup>d-kār「ボールペン」

[qalam-e-] kh<sup>o</sup>d-nevīs「万年筆」

kh<sup>o</sup>d-koshī「自殺」

15節 語呂あわせ複合語 二語目は意味なく、一語目の冒頭の子音をmまたはpに変える。例え  
ば bachche<sup>h</sup> machche<sup>h</sup>「子供」。この複合語はとくに会話において一語を強調して明瞭に表現する  
効果をもち、しばしば用いられる。現地人同士の会話に注意していればわかる。

## 第 11 課

この課はすべて前置詞を扱う。前置詞にはエザーフェをとるものと、とらないものと二通りある。  
エザーフェをとらない前置詞

(a) az

Az vezārat ma‘zūl shod. 「彼は大臣を解任された」 ここで「大臣」に具象名詞vazīrでなく、



抽象名詞vezāratが用いられることに注意する必要がある。同様に

Beh ‘oṣṣiyat-e-hei’at entekhāb shod. 「彼は委員会のメンバーに選出された」(115頁)。「メンバー」‘oṣṣでなく、その抽象名詞「メンバーシップ」に当る語が用いられている。

Az daryāft-e-kāghaz-e-tān masrūr gashtam. 「貴翰落手、欣快に存じ候」 masrūr gashtan 「うれしく思う」はkh<sup>w</sup>oshhāl shodanの文語的表現である。

111頁脚注にあるとおり、kheshtは「日乾燥瓦」、これに対し「焼成煉瓦」は ājerという。

(b) bā

mokhālef būdan 「反対である」の対、movāfeq būdan 「賛成である」も、この前置詞をとる。

(c) bar

afzūdan 「ふえる」の対は kāstan (kāh) 「へる」で、前置詞azをとる。

(e) be<sup>h</sup>

velkharjī 「奢侈」の構成は、vel 「自由な、気ままな」+kharj 「消費」= 「ぜいたくな」。これに抽象名詞化の-īがついたもの。

be<sup>h</sup> khodā 「神の名において、神に誓って」

baste<sup>h</sup> būdan 「関る」は bastegī dāshtan 「関係をもつ」と同義。

ta‘neh zadan 「ひやかす、からかう」は matalak goftanともいう。

(i) dar

shesh gaz dar chahār 「横六ギャズ、縦四ギャズ[の四角形]」 gazは長さの単位で約1メートル(259頁)。

119頁3節 エザーフェをとる前置詞

pīsh 必ずしも「前」でなく、「のそば、のところ」、120頁のnazdと同義。

sar-e-mīz 「机に向かって[椅子にかけて]」、rū-ye-zamīn 「床の上に[坐って]」の対。sar-e-  
kelāsは「授業中」。なお「私たちは坐っていた」は、mīneshastīm より neshaste<sup>h</sup> būdīmがよい。

tū 口語でよく用いられ、エザーフェもとらない。tū Fārsī 「ペルシア語で」、文語的には be<sup>h</sup> Fārsī.

## 第 12 課

この課は、ペルシア語にとって非常に重要で、他の言語にそれに相当するものがないためわかりにくい辞 ḥarfをまとめて説明してある。即ち-ī, エザーフェ, -rāである。

-ī

(a) 名詞的 (124—128頁)

(i) 名詞について形容詞を作る-ī

Yazd 「ヤズド」→Yazdī 「ヤズドの、ヤズドの人」

この-īはほとんどいかなる語や句にもつけられて便利である(125頁)。例えばdō tomānī 「2トマ

ーン(20リアル)の[物]」

124頁の地名の説明

Sāve<sup>h</sup> テヘランの西南の町

Rei テヘランの東南郊外

Marv (Merv) ソ連トルクメン共和国の都市、現在の地名は「マリ」

Āve<sup>h</sup> 一つはカズヴィンとハマダンの中間の町、現在はĀvajと呼ばれる。もう一つはサーヴェ地方の村、Ābe<sup>h</sup>とも呼ばれる。マルコ・ポーロ旅行記にSāve<sup>h</sup>, Kāshānとともに出てくる。

Dehlī インドの都市デリー *Delhi*

Sīstān イラン東南部からアフガニスタン西南部にかけての地域、古名 *Segestān*。

人名の説明

Nāder Shāh Afshār (1688—1747, 在位1736—47) サファヴィー朝のあとイランを支配し、インドにも攻め入った。アジアにおける最後の征服者といわれる。

Ya‘qūb ebn-e-Leiṣ-e-Ṣaffārī サッファール朝のレイスの子ヤアクーブ。サッファール朝は9世紀後半、ターヒル朝に次ぐアッバース朝下のイラン人政権。「サッファール」は「銅細工人」の意。

(ii) 形容詞について名詞を作る-ī

mehrabān 「親切な」→mehrabānī 「親切」

(iii) 不定を示す-ī これにはストレスがないことに注意。

hafte<sup>h</sup>-ī chand 「数週間」, sāl-ī dō 「二年ほど」は、いずれも古典的用法で、現代語ではそれぞれ chand hafte<sup>h</sup>, dō sāl という。

なお-īがついて副詞的に使われることがある。hafte<sup>h</sup>-ī dō rūz 「一週に二日」, sāl-ī yak martabe<sup>h</sup> 「一年に一回」など。

この不定の-īはある種のニュアンスを与えるものである。それがどんなものかは125頁下から127頁上までをよく読むこと。とくに126頁下半分、否定動詞とともに用いられること、che<sup>h</sup> 「何」に続く名詞(単・複とも)につくことを覚えておくとよい。

127頁下から次頁上にかけては、-īのつかない場合、即ち物が総称的に用いられるときには-īがつかないことが述べられている。

(iv) 関係代名詞的-ī これもストレスなし。mard-ī ke<sup>h</sup> …… 「……の男」

ペルシア文を発音するに当って、-īにストレスをおくかおかないかは重要なことである。あらかじめ文中の-īの性質を以上の説明により四つに分類し、前二者ならストレスあり、後二者はなしと、明確に区別して発音しなければならない。それが誤ると聞き手に意味が通じないことがある。

(b) 動詞的 (128頁)

(i) 二人称単数語尾 説明略

(ii) 古典的用法において過去形に附けられ、条件または継続を示す、現代ではbāyest-īにだけ

残っている。

エザーフェ (128—130頁)

これはペルシア語でもっとも面倒な辞である。即ちたいていの場合、文字に表れず、しかも詞と詞をつなぐための必須のものである。文章を読むに当ってエザーフェを入れないと、全く意味が通じない。エザーフェについては、つける場合と、つけない場合と、両方をわきまえなければならない。

つける場合

- (a) 所有 ketāb-e-pesar 「その少年の本」
- (b) 形容 mard-e-khūb 「よい男」
- (c) 前置詞につく posht-e-khāneh 「家のうしろ」
- (d) 親子関係 Rostam-e-Zāl 「ザールの子ロスタム」(シャー・ナーメの主人公)
- (e) 距離 dah farsakhī-ye-Esfahān 「イスファハンから10ファルサフ」
- (f) 同格 Ya‘qūb-e-peighambar 「預言者ヤアクブ」

その他の例をいくつか加える。

Khānom-e-Yāmādā 「山田夫人」

bīshṭar-e-mardom 「たいていの人々」

pīr-e-mard 「老翁」

つけない場合      つけない場所を⊗で示す

īn nou‘ ⊗ khāneh 「この種の家」

hameh ⊗ rāh 「道中ずっと」

dō metr ⊗ goudī 「二メートルの深さ」

yak līvān ⊗ āb 「グラス一杯の水」

janāb-e-āqā-ye-Bahman ⊗ Nakhosht Vazīr 「総理大臣バフマン氏」

その他の例をいくつか挙げる。

sīb ⊗ zamīnī 「じゃがいも」

ṣāḥeb ⊗ khāneh 「家主」

口語で早く発音するときエザーフェがおちる。Dāneshgāh ⊗ Tehrān 「テヘラン大学」

親族関係を示す複合語にエザーフェがつかないことは、第10課7節(b)の説明で述べた。

なお次の相違に注意すること。

hameh-ye-sāl 「一年中」

hameh ⊗ sāl 「毎年」, har sālに同じ。

-rā (130—132頁)

4頁第1課6節にいう、「ペルシア語には格変化はなく、限定名詞が動詞の直接目的なら、このことは接尾語-rāを附加することによって示される」と。「彼はその本をketāb-rā 私にくれた」

本課131頁の説明では、口語ペルシア語ではこれの使用に多少の許容があるとし、次の例文を挙げる。

Kodām ketāb-rā mīkh<sup>w</sup> āhīd? 「どの本が要るのですか」

Raft ketāb-i-rā bekharad. 「彼はある本を買いに行った」

第一の例文での-rāは単に直接目的を示すためである。第二の例文では、本書に説明があるように、ke<sup>h</sup> lāzem dāsht 「彼が必要とした」という節が省略されている、つまり「ある本」が何らかの限定を受けていると考えるべきであろう。

古典文ではこれは与格を示すのにも用いられた。

Ū-rā dō pesar būd. 「彼には二人の子があった」

この用法はアフガニスタンに残っている。例えば、Ma-rā bedeh. 「私にくれ」(イランでは、Be<sup>h</sup> man bedeh. という)

なお、まれではあるが次の用法もある。

Emrūz-rā chandān kār-i na-dāram. 「今日は私は大して用がない」 emrūz 「今日」だけで副詞として充分なのに、-rāをつけたのは、「昨日や明日はともかく、今日ばかりは」という風に、「今日」を強めるためである。

132頁4節は程度の大なることを表す句で、格式ばった表現であり、手紙文などによく用いられる。

「私は感謝の完全 kamāl-e-ektenān<sup>w</sup> をもっている」(私は大変感謝している)

「彼は苦しみの極端 nahāyat-e-sakhtī<sup>w</sup> の中で生活している」

「幸福の極端 nahāyat-e-kh<sup>w</sup> oshhālī<sup>w</sup> で」

133頁5節から135頁10節までは複数を扱っている。中でもとくに重要なのは7節以後で、ここでは単数形・複数形の区別が述べられている。

7節 「イランにはよい果物があります」 「果物」には色々な種類があるので、mīve<sup>h</sup>-hā と複数になる。

8節 総称的表現の場合、人間は複数形、その他は単数形をとる。

総称的に使われた名詞が述語であるとき、実際には複数でも単数形をとる。

「我々はすべて神のしもべである」, 「しもべ」 bande<sup>h</sup> は単数形。

総称的に使われた名詞がエザーフエで前の名詞と結ばれる場合は、複数形となる。

「このことは子供のやることだ」, 「子供」 bachche<sup>h</sup>-hā は複数形, 「やること」 kār は単数形となる。

9節 多くの名詞がva, o 「そして」 でつながっていると、それらの名詞は単数形である。

「大臣も代議士も将校も僧侶も、みな出席していた」(出席者の種類に重きをおき、その人数を考えていないからである)

10節 その他、理論上複数でも単数形をとる場合、つぎの例文の下線部。

「みんなの肩 dūsh<sup>w</sup>には重い荷があった」

「彼らは考え ‘aqīde’を変えた」

「我々は手紙 kāghazを交換した」

17節は、単数で形容詞である語が複数で名詞になるという説明である。

bozorg「大きい」→bozorg-ān「偉人たち」(133頁5節)

bāzdāsht shodeh「抑留された」→bāzdāsht shode-gān「被抑留者たち」(144頁2節b)

‘ālem「学識ある」→‘olamā「知識人層」(アラビア語的複数, 226頁19節b)

18節 発音も意味もよく似た単語を二つ並べるのは、ペルシア語でしばしば用いられる修辞である。日本語に訳するにもなるべくその感じを出すようにしたい。

tak o tanhā「たったひとり」

besyār o bīshomār「多数で無数」

20節 va, o「そして」について本書では五つの用法を挙げてあるが、「そして」だけの意味を知っていれば充分である。

(d) Gol hamīn panj rūz o shesh bāshad. 「花はわずか五, 六日しかない」(ゴレスターン)

これは古典的用法であって、現代文では「五, 六日」のことをpanj shesh rūzという。40頁8節にいうように、おおよその数をいうにはそれらの数を並べるだけでよく、その間にo「そして」やyā「または」を入れない。「二, 三」はdō sehという。

なおvaとoとの使いわけであるが、意味がかなり密接につながっていればo, そうでないときはvaとする。

rūz o shab「昼と夜」

Āmad va az mā khodāḥāfezī kard. 「彼はやって来て、我々に別れを告げた」

#### 語釈

to compare A with B (128頁) 「AとBを比べてその相違に気をつける」 ここでは、-īのあ  
るなしによる違い、即ちmard「一人前の男」が総称的に用いられているのに対し、mard-ī meḡl-  
e-shomā「あなたのような人」が限定的に用いられているという相違に注目せよ、ということであ  
る。